平成28年度第２回公立大学法人宮城大学経営審議会議事録

日　　時	平成28年9月2日（金）午後1時00分から午後2時37分まで
場　　所	宮城大学大和キャンパス本部棟４階　応接会議室
出 席 者	阿部博之委員，大山健太郎委員，今野敦之委員，櫻井武寛委員，佐々木昭男委員，西垣克委員，河端章好委員，西城正志委員，高橋芳行委員，長屋正人委員，高山登理事，岩堀惠祐理事，竹内文生理事
事 務 部	佐々木部長，千葉次長，加茂学務課長，小松企画財務課長，菅澤総務グループリーダー，齋藤企画予算グループリーダー，齊藤出納グループリーダー，名取主査
議事概要	1　開会（午後１時00分） 2　挨拶 開会に当たり，理事長が挨拶を述べた。その内容は次のとおり。 本日は３つの議題がある。 一つ目は学長選考について。 残りの二つは来年４月からの新しい制度への移行にあたり，文部科学省が届出を受理したことに伴う，県の中期目標と本学の中期計画の変更に関するものである。 よろしく審議願う。 3　議事録署名人の選任 西垣議長から，前回会議の議事録について出席者に確認を求めた後，今野委員及び髙橋委員が議事録署名人に指名された。 4　審議事項 (1) 学長候補者の推薦について （西垣議長） 経営審議会として２名以内の候補者を学長選考会議に推薦できることとなっている。８月２４日までに委員からの推薦をお願いしていたが，河端委員から１名の推薦があった。手順に則り，経営審議会からの推薦者として推薦してよろしいか審議をお願いする。 河端委員から説明願う。 （河端委員） （資料１に基づき河端委員から説明）　※資料１は会議終了後回収 文部科学省科学技術・学術政策研究長の川上伸昭氏を推薦する。 西垣学長の進める大学改革については，文部科学省に届出が受理されたところであり，来春がそのスタートとなる。教職員の力を最大限に引き出して，改革を進めなければならず，新しい学長には高いマネジメント能力

	が求められるものである。その点について，本候補者は経歴から見ても適任である。 （阿部委員） この方以外の候補者はいるのか。 （河端委員） 教育研究審議会から１名推薦があった。 教職員１０名からの推薦もできたが，そちらは無かった。 （西垣議長） 他に質問等がなければ，投票による選挙を行う。投票の間は議場を閉鎖する。投票箱を持って回るので，投票用紙を入れて欲しい。 選挙立会人に佐々木委員をお願いしたい。（佐々木委員，了解） ※事務局から投票方法に説明の上，投票実施 （西垣議長） 結果を報告する。本日の有権者は１２名，投票者数１０名，欠席２名，無効投票は０，有効投票は１０票で，過半数は６票である。 推薦のあった川上伸昭氏は信任可９票となり，過半数を占めたため，本審議会における推薦者として川上氏を選考会議に推薦することとする。 (2) 公立大学法人宮城大学中期目標変更案に対する意見について （説明：河端委員） （資料２に基づき河端委員から説明） ７月１９日付で知事から理事長あてに，中期目標変更に関する意見があれば９月５日までに提出するようにと通知があった。こちらは経営審議会の審議事項となることから，本日御審議いただき，最終的には理事会で決定をする。 中期目標を県が変更する理由としては，本学が大学改革の一環として学部・学科制から学群・学類制に移行することに伴うものである。 変更内容については，組織が変更になることによる文言修正を行うものである。 本日，経営審議会で御意見の有無を確認し，９月５日に開催する臨時理事会で諮ったうえで，県に提出する。 （西垣議長） 何か質問等があれば。 （阿部委員） 文言整理なので特に意見は無い。 （西垣議長）

学部から学群に移行するという文言の変更ではあるが，大学の在り方からすると本質的な変更なので，そのあたりを十分理解していただくのはなかなか難しい問題である。

日本の大学制度は教授をピラミッドとする講座制が主流であるが，学科目制ということで本学の中を見ていくと，違う学部で同じようなジャンルを受け持つ教員が出て来たりすることで無駄が生じる可能性があった。本学では，今後は学生という集団と教員という集団を「学部」という箱の中の自己完結ではなく，「大学」という全体のフィールドの中で最適な在り方を選択できるように改革を行う。本学のような規模ではその方が効率が良い。

御意見が無いようなので，意見無しとして理事会に諮らせていただいてことでよろしいか。

＜異議無く承認された＞

(3) 公立大学法人宮城大学中期計画変更案について

（説明：河端委員）

（資料３に基づき河端委員から説明）

今ほど御審議いただいた県の中期目標は今後，県議会に上程をするものであるが，県議会で議決されれば，その後，法人に対して中期計画の修正が指示される予定である。

本日は，その修正指示があることを想定し，先んじて中期計画の変更案をこの場で御審議いただくもの。

基本的には，学部を学群に変更する文言修正であり，また学生生活委員会の廃止により，スチューデントサービスセンターと書き改めた個所もある。文言修正以外の変更は行っていない。

（西垣議長）

何か質問等があれば。

御意見がないようなので，ご承認いただき理事会に諮らせていただいてことでよろしいか。

＜異議無く承認された＞

5　その他

（櫻井委員）

最近，就職活動に伴う「おわハラ」が酷いと聞く。

学生が被害に合うのは危険である。

大学としても注意していただければありがたい。

（西垣議長）

ありがとうございます。

	本学のキャリア開発センターの報告では，全国平均レベルで内定が出ている。「おわハラ」は昨年の方が報告が多かった気がする。今年は今のところ企業とのトラブルは聞こえてきていない。 本学としては学生に「一人で１０社の内定を取るようなことはしてはならない」と指導している。 企業と学生のマッチングが相思相愛になるように，今年から卒業生の動向調査をやろうとしている。地元の企業と大学の信頼関係が結べれば，学校推薦枠を作った上で，個別のマッチングをするということができないかと思っている。 今後，地元企業にもインターンシップをお願いしようと考えているので御協力をお願いしたい。 地元志向がひと時より低下しているように感じる。地方創生という言葉が広まることと相反する動きとなっている。この動きは，大学選択にも影響を与えており，就職で東京に行くのなら，大学も東京で良いじゃないか，という親の考えが強まっているように感じる。新幹線の発達により，より東京一極集中が進んでいる。 (大山委員) 当社の状況を少しお話すると，去年は内定取り消しが酷かった。内定を１００名出したが３０名の内定取り消しがあった。今年は落ち着いている。それでも１割は内定を取り消す。 学生のブランド志向が強く，ブランドの高いところの内定が取れると，それ以外の内定を取り消す，という流れになっている。そこで，当社では今年からアスリートや海外といった本人の持っている特技に応じた募集を始めた。この採用方法は，ほとんど内定取り消しが無い。 学生側も就職した後に営業に行くのか企画に行くのかわからない状況で就職活動をしている。これが，学生が企業規模・ブランドといったものに頼らざるを得ない状況を生み出していると言える。 当社は地元企業なので，当然，地元の学生をできるだけ採用したいと思っているが，面接をしてみると東京の学生に比べて，プレゼンが下手である。地元出身でも東京に行った子に比べると負けてしまう。揉まれていない。意欲を言葉にすることができない学生が東北には多い。採用には不利である。当社には指定校はなく，本人の人物を見ている。東北の採用者は２割を切るレベル。企業の求める人物像と学部を卒業した学生がマッチしていない。 (今野委員) 先日，中小企業団体中央会の役員会で話題になったのは「宮城大学はどこからお金をもらっているんだろうね。宮城大学を卒業した学生が東京に就職するというのはどういうことなんだろうね。」ということだった。県の税金を使っているということなのだから，その点は，大学としても良く

考えていただきたい。

医学部を出た学生には勤務地に縛りがあるケースもある。防衛大学を出た学生が民間に就職することも問題になっている。それに倣って，宮城大学を卒業した学生の多くが県外に就職するのはなぜなのか，ということが役員会の話題になった。

大学として就職の指導はどうしているのか。

それから，先ほど学長から学校推薦枠という話があった。過去にはそのようなことが主流であったが，今はない。学校推薦ということは考えていただきたい。信頼関係の中で，そのような学生は優先して取りたいという気持ちになる。中小企業はそんなに学生が集まってくるわけではない。我が社は恵まれていて，８名の採用枠に１８０名の応募があった。採用者を選択するのは大変な作業になるわけだが，我が社としては「絶対に内定辞退をされない学生」を選びたかった。それには，本人と何度も会ったり，場合によっては親に会うところまでして，採用者を絞っていく。中小企業にはそういうことができる。

だが，なかなか宮城大学の学生は我が社に来ない。

（西垣議長）

本学では企業研究会ということで，大学にブース作って説明をしていただくイベントを開催しているが，延べで１１０社ほどに来ていただいている。毎年，中小企業の皆様にもお声がけしているが，なかなか来ていただけない。また，学生の方にも中小企業というレッテルを貼って考えるのではなく，その子の人生設計という面でキャリア支援をしているが，本人を説得したとしても親が難関である。保護者と意見交換をしてみても，一時よりも安定志向が強まっていると感じている。さらに東北の人が東北を愛していない，という感じがする。なかなか難しいところだ。その思考を変えるためには，インターンシップを長くやるのも良いのではないかと考え，カリキュラムもそのように変更しようとしている。

（今野委員）

インターンシップも単に学生が来れば良いということではなく，将来就職する意思がある学生だけに絞っている。それでも学生は来る。

去年のインターンシップに参加して就職した学生が２名いる。そうなれば理想である。

（西垣議長）

本学でもどのようなインターンシップを行うのが良いか検討をしているところである。そのあたりの御意見を今後もぜひいただきたい。

（大山委員）

宮城県の企業が集まってインターンシップを強化しようという動きがある。今，今野委員から発言があったとおり，単なる企業研修では意味がない。もうちょっと事前に説明会をするとか，学生に意志を持ってもらわな

	いと，単なる企業研修で終わってしまうし，インターンシップに優秀な子が来ない状況になる。ニーズとのギャップがあるのが現実である。それでもやらなければならないとは思っているが。 親のことを言えば，３０年前に自分が入れなかった大企業に子供を入れたがっている。企業のスリム化・効率化が進んでいるなかで，大企業の幹部になれるのは，本当に一握りの人間である。日本の将来を見据えたときにそれでいいのかということは，親にも考えてもらいたい。 （西垣議長） 看護の実習の実績を見てみると，実習に行った先には就職しない，という傾向が見られる。その結果，首都圏に流れるということが出てくる。 インターンシップも上手くマッチングするケースもあれば，インターンシップ先には絶対に行きたくない，というネガティブな結果と両方出てくる。これをどうマネジメントしていくかということについては，検討していきたい。 （大山委員） 学校では教員が学生の将来を考えた「未来志向」の話を学生にしているが，現場はそうではない。そのギャップがある。そういう現実も見てもらわなければない。 （西垣議長） 教員のインターンシップへの取組方も含めて，改善していきたいので今後も御指導をよろしくお願いしたい。 （佐々木委員） 市町村とのインターンシップのマッチングの在り方というのは，今のところ形がない。町村会として協力できることがあれば，市町村との橋渡しもしたいし，町村会自体へのインターンシップもお願いしたい。 町村会の採用に関していえば，１名の枠に対して１７～１８名の応募があり，第一次選考で８名に絞ったが，その中に新卒の学生は１名しかいなかった。あとは，大学卒業後に関東で働いていた，などという応募者が多い。一回働いた後に，「自分には合わない」といって仕事を辞める人が多くなっている印象だ。先ほども安定志向の話があったが，「仕事は楽で，そこそこ給与も安定している」というところを求めている感じがする。そういう人は面接技術も長けている。しかし，そのような人物が組織を担っていけるかは疑問である。従って，町村会としても，人物を見ることができるインターンシップを望むので，ぜひ声をかけて欲しい。 （西垣議長） 先ほど説明した企業研究会には，県内では宮城県と仙台市だけは来る。一応，全てに声をかけているのだが，来るのはその二つ。どうしても，その二か所に学生の志望も絞られる。ぜひ，町村会としてもブースを出展いただきたい。

	我々としても地域創生という新しい学系を作ったので，公務員コースをいままでよりもグレードアップしようと考えている。地域創生の礎になるような人材を育て，小さい市町村にも行ってもらうことが本学のミッションと思っているが，なかなか難しい。 資料としてお配りしているが，大和町の広報のページをいただいて学生に作らせるという企画が実現した。他の市町村とも，まちづくりの面などで学生を携わらせて，足元を知るということをやらせている。 (今野委員) 今，採用の面接をしてみると女子学生が良い。 (西垣議長) 本学も入試改革をしようとしているが，今の入試で行くと，７割が女子学生で女子大化している。成績優秀者も軒並み女子。 ＡＯ入試では元気の良い男子を採択したいという考えもある。 (小松課長) 次回の経営審議会は，来年３月の開催を予定している。その際には，平成２９年度の年度計画案・予算案などを御審議いただく。よろしくお願いしたい。 (午後2時37分　閉会)

この議事録は，平成 28 年度第 2 回公立大学法人宮城大学経営審議会の議事録である。

公立大学法人宮城大学

経営審議会議長　西垣　克

議事録署名委員　今野敦之

議事録署名委員　髙橋芳行